「活力ある学校」を目指して

我孫子市立湖北台東小学校長　鴨下（かもした）　隆（たかし）

１　はじめに

本校は、我孫子市の東部に位置し、通常学級12学級、特別支援学級４学級、全校児童293名と我孫子市内でも比較的小規模の学校である。職員は、育児休業代替講師を含め、16学級中11名が経験年数10年以下であり、平均年齢36.3歳の若い職員集団の学校である。学校教育目標は、「活力のある学校」であり、「精一杯遊び、学び、互いのことを考え、思いやることができる子どもの育成」を目指している。そして、子供たちには「ひ・が・し」という三つの合い言葉がある。

「ひがし」の「ひ」は、人を励まし応援
「ひがし」の「が」は、がんがんあいさつ
「ひがし」の「し」は、静かに話を聞く

この合い言葉にある姿を目指す児童像として、全職員が子供たち一人一人を大切にし、子供のために一生懸命になれる職員集団を目指している。

２　子供のための「チーム湖北台東小」

学校がチームとして一丸となるためには、校長の個人的な思い入れだけではなく、どの職員も納得して共感できる目標を設定する必要がある。そのために、職員会議で意図や価値観を確認し、共通理解を図り、士気を高め、教職員のやる気と笑顔に満ちあふれた職場環境をつくっていくよう心がけている。子供たちに何が必要なのか、学校行事や諸活動の中で何をねらいとし、どんな力を身に付けさせるのか、職員一人一人が意識し、児童の実態に応じて方法を工夫することが重要である。そして、一人一人の子供ができるようになったことや頑張っている姿を認め、達成感を得させたいと考えている。ほめて伸ばすことで子供たちのやる気が高まり、自信を持って活動できるようになる。また、学級の子供たちの課題や心配なことは、すぐに情報共有して、組織で対応することを心がけている。担任一人ができることには限界があるが、チームとして対応することによって、多様な考えが生まれることもあり、役割分担をして解決に当たっている。このように、子供の活躍の場を意図的に設定する企画力、子供の努力や頑張りを見逃さない観察力、情報を共有し、迅速に対応していく組織力を職員に求め、子供のためにワンチームになれる学校づくりに取り組んでいる。

３　問題解決型の授業の実施

子供がわくわくどきどきして分かりやすい授業が学習に対する活力を生む。本校では、算数科を中心に学習のゴールを明確にし、自力解決する場面や学び合いの場面などを機能させ、関連付けながら課題を解決していく問題解決型の授業を学習のスタンダードとして位置付けている。授業の始めに、教師と子供たちが話し合いながら学習問題を設定し、授業の最後に「まとめ」や「振り返り」を通して理解を深めるスタイルである。学習のゴール

を明確にすることで、「この時間はこういうことがわかればよい」と一人一人が自分の考えや見通しを持って授業に臨むことができている。また、評価は、子供の成長のためにあると考えている。結果からマイナスを指摘するのではなく、学習のプロセスからプラスを見出し、具体的に評価することが大切である。人には得意も不得意もある。子供の苦手なことを平均値にすることよりも、個性や得意に光を当て、成長を評価することで、子供が自分に価値を感じ、一層やる気を高める評価でなければならないと職員に日頃から伝えている。

４　職員を支えるリーダーを目指す

リーダー論にはいろいろな考え方があるが、職員を引っ張っていくリーダーを目指した場合、指示する側と指示される側の関係が強くなり、校長の指示に対して、形式だけ合わせて取り組むという形になりやすく、職員の向上心や協働性が低下し、主体的に行動しなくなってしまうと考えた。そこで、「校長は一人一人の職員のよさを活かすために存在する」と考え、職員を支えるリーダーを目指した。校長として、職員の自主性を尊重しながら成功や成長を認め、協働を意識した実践を心がけている。その結果、信頼関係が育まれ、職員とのコミュニケーションが円滑になってきた。そして、一人一人が能動的に組織を導いていく構図になり、活力ある学校の具現化を図るために、気配りや目配りを心がけた。

５　職員の主体性が学校の活力を生む

ＡＩ時代のこれから、子供たちに求められるのは、新しいものをクリエイトしていくことであり、そのために「主体性」が求められている。そうであれば、職員も「主体性」をもって仕事に臨むことが必要である。どんな職員にも長所がある。よさを認めて、心に火をつければ自ずと力を発揮する。学校に必要な「子供のために」を探求し、職員が主体的に考え、判断し、行動する風土をつくるために「傾聴と対話」を心がけた。

人事評価における職員との面談では、学校経営に対する校長の思いを伝え、期待する役割を説明し、「自分のよさをどのように活かせるか」という視点での対話を心がけている。また、日頃から積極的に声をかけ、実践の成果は褒め、話や悩みから具体的な手立てを示し、「これはどう考える？」という問いや「子供のためになることは実行してよい」という後押しをしている。そして「いつも子供たちのためにありがとう」と感謝やねぎらいを伝えている。こうした対話は、長所を伸ばし、心に火をつけ、子供たちのために一生懸命になれる活力ある職員の育成につながると考える。子供にとっての最大の教育環境は教師である。教師が子供たちのために自分で考え、判断し、工夫しながらいろいろなことに取り組み、クリエイティブであれば、子供たちも影響を受け、主体的に行動できるようになり、学校に活力が生まれるのである。

６　おわりに

校長としての責任はあまりに大きく、常に視野を広く持ち、最悪を想定して先のことを考えるなど、緊張が続くこともあった。しかし、本校の職員は、チームであることの重要性を理解し、前向きに教育活動に取り組んでくれた。職員には子供たちのために挑戦を続けてほしいと願っている。うまくいかないことがあったとしても、粘り強く取り組むことで指導力が向上し、学校の取組も充実して活力が生まれる。今後も、職員が意欲を保ち、子供たちのために失敗を恐れずに教育活動に取り組むことができる学校づくりを心がけていきたい。

「働き方改革」の視点で公開研究会を創る

栄町立竜角寺台小学校教頭　髙橋（たかはし）　圭（けい）

１　はじめに

平成29年４月28日文部科学省発表の「教員勤務実態調査結果（速報値）」で、いわゆる「過労死ライン」を超える時間外勤務職員が中学校で約６割超という結果がインパクトをもって報じられた。以来、「働き方改革」の波は学校現場を確実に変えつつあると感じる。

本町でも町教育委員会教育長の強いリーダーシップの下、限られた財源の中で、様々な施策が打ち出されている。例えば、町単費にて「教員アシスタント職員」が全小中学校に配置され、教材作成、調査・報告資料作成、集金業務等を担い、学級担任が児童と向き合う時間を具体的に捻出することができている。

２　公開研究会に発想の転換を

この教育界の転換期に教頭職を拝命した。教頭として何ができるだろうと自問した時、本校の取組を見直すと、本校は県の学力向上プラン「ちばっ子の学び変革」推進事業の研究指定の２年目を迎えていた。そこで、「公開研究会＝多忙」という概念を、教頭自身が疑ってみた。「公開研究会を働き方改革の好機と捉えられないか」と。

研究指定最終年度、本校には既に「校長の強いリーダーシップ」「教務・研究主任の先見性」「授業者の指導力」「職員の献身性」が揃っていた。あとは教頭として、職員にいかに気持ちよく汗をかいてもらうか、そして参観者に「本校でも真似したい」と、各校で実践してもらえるかだけを考えればよかった。

３　「ねばならぬ」公開から「でもいい」公開へ

本校は、平成の幕開けと共に産声をあげた。令和となり、９年間にわたる算数科研究の集大成として、公開研究会を11月に実施し、「主体的・対話的で深い学び」の手法を取り入れた算数科の実践を県内外に発信することができた。この公開には、「働き方改革」の視点で取り組み、「公開はこうでなくてはならぬ」とばかりに時間と労力を際限なく注ぐ方式から、「こういう公開でもいいのではないか」と、限られた時間と労力の中で最大限の効果を生むような方式へと発想の転換を図った。そして、これが必ずや我々自身の成長にもつながると信じ、実践してきた。

以下に本校の取組の工夫点を、主に「働き方改革」の視点で列記してみる。

⑴完全分業制

「仕事はみんなで」は聞こえがいいが、例えば研究紀要の校正など、必ずしも全員で行うことがよい場合ばかりではない。そこで、校内の研究推進委員会が、授業公開に関する仕事を以下の三つに明確に「仕分け」た。

①全員の力を必要とする仕事
②スタッフ等数名で十分な仕事
③個人で進める仕事

効率を優先して仕事を進めた結果、特に日々の学級経営で奮闘している若年層の職員からは、自分の仕事の時間が保障されていて大変有り難いと好評であった。また、一人一人の責任感も高まった。

⑵時限制

上記に関連して、全ての仕事に期日だけでなく時刻の期限を設定した。後述する指導案検討会等も勤務時間内とし、終了時刻を守っ

た。その前提として、学校にありがちな集合・開始時刻や提出期限のルーズさを皆で気を付け合った。プライオリティ（優先順位）を明確に打ち出し、同時に職員が自由に使える時間も尊重した結果、日々の仕事の効率も向上した。

⑶指導案検討会が待ち遠しい

取組上の工夫とは異なるが、職員の意識の点で指導案検討会について記しておきたい。

公開研究会を控えた学校では、校内指導案検討会が毎週のように行われるのが常で、本校も計画的に検討会を重ねてきた。「本時の展開」の検討では、「きっと○○さんが既習事項を踏まえてこう言ってくる」「そこに△△さんが異を唱えてくる」「でも□□さんの気付きで授業が動き出す」等々、テーブルを囲んだ参加職員の声で児童の様子が再現されていった。職員の顔にはいつも自然に笑みが浮かび、笑い声が絶えなかった。皆が時間を捻出しての指導案検討会ではあったが、参加職員の顔に「多忙感」はなく、私自身も検討会に出席するのが楽しみだった。

⑷夏季休業中の全体研修日は２日間のみ

前述の業務分業制により、仕事の締切日・時刻を厳守することを全職員で確認の上、夏季休業中に全員で集まる研修日は２日間にとどめた。また環境整備等の為の作業日も１日のみとし、職員、保護者及び児童、地域のボランティアの方々による除草作業のみ行った。

⑸コンパクトな学校公開

近県の国立大学附属小学校の公開授業から着想を得、公開当日の授業展開・全体会・講演会会場を体育館とした。研究の軌跡を記した掲示物で体育館に設定した模擬教室を囲み、参観者が展開授業と研究の足跡を同時に観られるよう工夫した。また来賓と参観者の動線に沿って環境整備計画を立て、主な整備は日々の清掃活動やロング昼休みなどに児童とともに少しずつ進め、放課後の作業はなくしていくよう努めた。

⑹地域の力を武器に

本校には開校以来「竜小応援団」等の地域ボランティアが学校を支えてくださっている。これまでも、「学習ボランティア」によるチャレンジタイム（ドリル学習）での丸付けや、「あおぞら会」による花壇等の整備をお願いしてきた。公開当日も、日頃児童の登下校の安全指導をしてくださっている「見守り応援隊」の方々が、PTA役員と連携して来場者用駐車場の整理や学校までの案内の仕事を快く引き受けてくださった。おかげで職員の仕事分担を広げずに済み、大変助かった。

４　おわりに

公開当日朝の職員室の雰囲気がとても明るかったのを覚えている。重責の授業者にも笑顔があった。公開を楽しんでいる職員を誇らしく思った。これまでの研究実践で培った指導力と、公開研究会開催から得た働き方の創意工夫が、全職員にとって今後の教員人生の糧となったと確信している。少なくとも私自身は教頭として大きな経験知を得ることができた。本校公開研究会にお力添えいただいた文部科学省国立教育政策研究所教育課程調査官の笠井健一先生をはじめ、千葉県教育委員会、栄町教育委員会、栄町内小中学校の各先生方、及び本校PTA、地域ボランティアの皆様へ、この場を借りて感謝申し上げたい。

一隅を照らす。こんな想いで教師の道を歩み始めた自分が、学級、学年、学校と、気付けば照らすべき場所は一隅とはいかなくなっていた。初任から今日まで、中学校、高等学校、教育行政、そして現在の小学校と、それぞれの場所で素晴らしい同僚と共に汗をかいてきた。その中で「先生がいたから」「先生でなければ」と言ってくれる同僚にめぐり逢えたことが、今の自分の心の支えとなっている。これからも自分が教頭として、全ての人々の道を照らせるよう、更に研鑽を積み、職務に邁進していく所存である。

主幹教諭のやりがい

白井市立清水口小学校主幹教諭　大友（おおとも）　桂（かつら）

１　はじめに

近年の若年層教諭の増加と、ベテラン教諭の減少により、若年層教諭の育成が喫緊の課題となっている。そのような中、自分のような年齢層の教員は一担任としてではなく、学校の中核として職員と共に学校を運営していかなければならないと考えるようになった。

２　主幹教諭研修会

平成29年度に現在校に赴任し、平成30年度に主幹教諭になった。その年には、自分を含めた市内主幹教諭３名で、２か月に１回程度研修会を開き情報交換を行った。

主幹教諭は、校長及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、児童の教育をつかさどることを職務とする。研修会では、①教頭の補佐機能　②企画調整機能　③相談機能　④人材育成機能　⑤渉外機能　⑥指導・監督機能、の六つの機能について話し合った。

３　主幹教諭研修会における成果と課題

各校、六つの機能において実態に応じた取組があり、自校での取組に生かすことができた。教務主任と主幹教諭との違いについて明確にしたかったが、その仕事内容を明確に線引きすることができないことが分かった。しかし、主幹教諭２年目となった今、「これは主幹教諭だからこそできる仕事だろう。」と思える内容が見えてきた。

４　若年層教諭の育成

本校は、全15学級中８名の担任が若年層教諭であり、若年層教諭の育成が喫緊の課題となっている。

校内巡視による各学級の把握。授業観察後の助言指導。学級の補助。担任と保護者とがスムーズにコミュニケーションがとれるようにするため、あらかじめ話す内容をまとめさせたり、話す内容を考えたりすることもある。さらに、保護者面談への同席。子供と向き合う時間がとれない若年層教諭の仕事を学校補助教員にお願いし、それでも補えきれない仕事は主幹教諭として自分が担う。

５　教頭との連携

主幹教諭は、教諭の中核として学校を運営していく存在でなければならないと同時に、教頭を一番近くで補佐する存在でなければならないと考えている。

教頭が行っている仕事の中にも、命を受け主幹教諭ができる仕事がある。そのような仕事を率先して行い、教頭が学校を運営しやすい環境を作る。これも主幹教諭の大切な仕事の一つである。

例えば、教頭が窓口である教育委員会やＰＴＡとのやりとりも、主幹教諭レベルでできる案件については主幹教諭が処理していく。教務主任にはできない役割であると考える。

６　おわりに

先を見通した計画、保護者と担任間の調整、職員間の調整、若年層教諭の育成など、やるべき仕事は大量にある。しかし、主幹教諭は間違いなくやりがいのある職である。これから学校の中核となっていく先生方、主幹教諭という選択肢はどうであろうか。

教科指導と言語指導

県立千葉聾学校小学部教諭　早川（はやかわ）　慶（けい）

聾学校では、子供たちが言葉の力を身につけ、コミュニケーション能力を高められるように、授業だけではなく日常生活全般で、日々言語指導が行われている。

私は、１年目に中学部の社会科を担当した。そこでは、教科指導を行う上で、単元全体を見通した教材研究や授業構成の工夫、子供たちをよく知ることの大切さを学んだ。板書や発問の内容、資料の提示の仕方を見直したり、聴覚障害がある子供の困難さを改めて学んだりしたことで、聾学校における教科指導の方法を深く学ぶことができた。

２年目の今、私は小学部２年生の担任をしている。昨年度と担当する学年は変わったが、聾学校に通う子供への支援として、「実物を用いる」「写真や文字カードで視覚化する」等は引き続き行っている。実物を見せながら話すことで、自分の経験と言葉が繋がり、その言葉に対する理解が深まっている様子が見受けられる。子供のそのような様子を見ると、私自身とても嬉しく思う。教科指導を大切にすると同時に、言語指導にも力を入れている。難しさもあるが、児童が、文章を読む時に既習の言葉を見つけて「わかるぞ」と目を輝かせている姿を見ると、やりがいを感じる。今後も、聾学校特有の言語指導に丁寧に取り組みながら、子供の実態把握、教材研究という基本的なことを疎かにせず、初任者研修を生かして「わかりやすい授業」「一人一人の実態に合った教育」ができるよう頑張っていきたい。

子供を知る

木更津市立木更津第一中学校教諭　鹿嶋（かしま）　美咲（みさき）

昨年度の初任者研修や今年度の研修を通し、「徹底した生徒理解に努めること」や「チームワークの大切さ」を学んだ。

まず、生徒理解においては、一人一人の育ってきた環境や考え方をよく把握し、共通理解した上で学習指導や生徒指導に努める必要があることを、身をもって感じた。ただ指導するだけでなく、なぜそうなったのかをきちんと説明し、生徒に寄り添い、待ち、共に成長していきたい。また、初めての学級担任を務め、経験したことのない仕事や慣れない環境での勤務だったため、悩むことも多かったが、同期や学年職員、管理職の先生方の支えがあり、ここまで仕事をやりぬくことができた。学年、学校、全職員との報告・連絡・相談を密に行い、徹底した生徒理解をすることで、生徒に少しずつ変化が生まれたり、生徒・保護者との信頼関係を築いたりすることができると感じた。常に「自立」を教育活動の目的に据え、自分の価値観を押しつけるのではなく、子供たちに語り、関わり続けていくことが生徒の正しく前向きな自己決定に結びつくものと信じている。

この１年間で学んだことをこれからの学校生活に生かし、学び続け、生徒と共に成長し続ける教員でありたいと思う。今、教員として幸せな生活を送ることができていることに感謝し、それを叶えさせてくれた生徒や家族、諸先輩方に恩返しができるよう、日々精進していきたい。

数学的な見方･考え方を育てる授業づくり

八千代市立勝田台南小学校教諭　村山（むらやま）　結実（ゆみ）

１　はじめに

「子供の考え方、学び方を大切にして、子供の言葉で授業を創りたい」と思い、日々授業を重ねてきた。今回、「授業を創る」というテーマをいただき、とてもうれしく思った。

小学校学習指導要領の算数科の目標は「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とある。数学的な見方・考え方をどう働かせ、どう成長させるかを考えながら、子供たちと授業を創っている。

２　本校の研究について

本校では、「数学的な見方・考え方を育てる授業の創造」を研究主題として、算数科の研究に取り組んでいる。数学的な見方・考え方を顕在化させ、それらを働かせた数学的活動を行い、それらの成長を目指す。数学的な見方・考え方を育てる授業の創造は、深い学びにつながると考える。

⑴教材研究・指導計画

まずは、本単元に関わる数学的な見方・考え方は何か、教師がその視点から教材研究を深める。

⑵問題把握

子供が数学的な見方・考え方を働かせて、自力解決できるように、素材提示や発問の工夫をして、既習と本時の課題を異同弁別することで問いを引き出す。また、子供がいつでも数学的な見方・考え方に触れることができるようにカードにまとめて掲示しておく。

⑶比較検討・板書

教師が子供の言葉やつぶやきを取り上げて数学的な見方・考え方に着目するような話し合い活動をする。また、子供に意識させるために、本時の問題解決で働かせた数学的な見方・考え方を板書に残し、価値付けていく。

⑷まとめ・振り返り

何に着目して、どんな数学的な見方・考え方を働かせて解決できたのか、学びが深まったかどうか、振り返り活動を行う。

３　授業を創る　（第４学年「小数」）

⑴教材研究・指導計画

①本単元につながる系統図

領域を越えた本単元につながる数学的な見方・考え方を意識した教材研究を行い、系統図にまとめる。

②指導計画の工夫

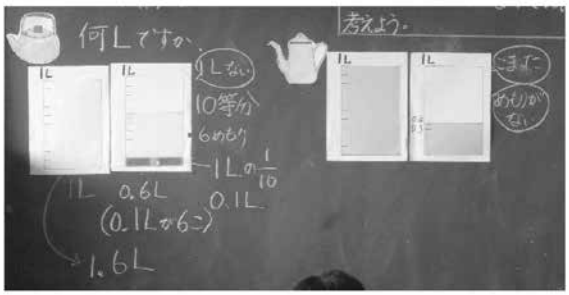
指導計画に１時間ごとに育てたい数学的な見方・考え方を明記し、子供がそれらを感じられる学習を仕組む。

指導計画の一部

育てたい数学的な見方・考え方
・１L を10等分して0.1L を作った時と同じように、0.1L を10等分して新しい単位を作っていけばよいだろうと発展的に考える。 ・今までと同じように10等分が便利。
・小数の表し方も、整数の時に学習した十進位取り記数法と同じ仕組みであることがわかり、統合的に考える。

⑵問題把握

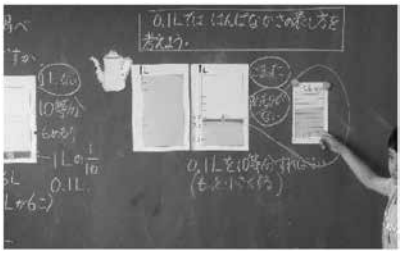
本時のねらい「0.1L で量れないとき、さらに10等分して新しい単位を作る」に迫るために、１L を10等分して0.1L を作った３学年の学習を想起させた。そのキーワードを板書し、数学的な見方・考え方を意識させ、自力解決の見通しをもたせた。本時の課題を提示し、異同弁別し、本時の問いを引き出した。



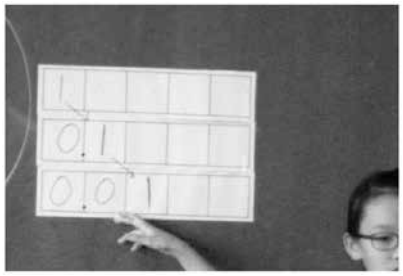
問題把握で数学的な見方・考え方に気付く

⑶比較検討・板書

１L を10等分して0.1L を作った時と同じように、0.1L を10等分して新しい単位を作るよさを感じることを本時のゴールとして、数学的な見方・考え方を働かせて授業を創った。今までの単位で量れないときには、その単位をくずして、さらに小さな単位を作るとよいことや、どうやって新しい単位を作るか、なぜ10等分するのかなどの切り返しの発問をして数学的な見方・考え方を顕在化させる。最終板書には、問いを解決するために子供たちが働かせた数学的な見方・考え方が残してある。子供たちの説明やつぶやきの中から、どの言葉を取り上げればよいのかは、前述の教材研究によるところが大きい。



10 等分して新しい単位を作る



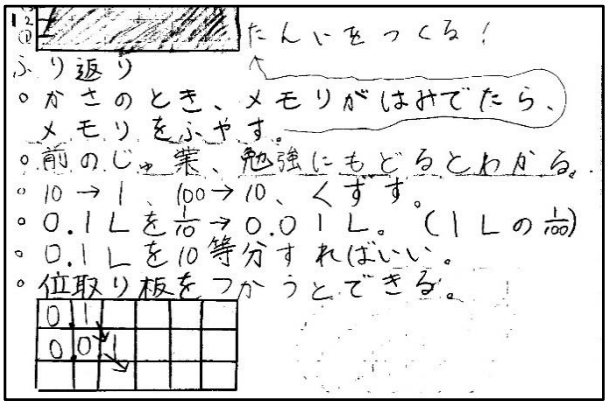
0.01 を位取り板とつなげる

位取り板とマスの考えをつなげる

最終板書

⑷まとめ・振り返り

どんなことが分かったのか、どんな考え方をするとできるのか、今までの学習で同じようなことはなかったかなど、子供たちが学習を振り返る視点をもつことで、統合的な考え方や発展的な考え方ができるようになってきた。



Ａさんの振り返り

４　おわりに

数学的な見方・考え方を育てるためには、それを働かせる授業を組み、それに気付かせる話合いを行い、板書に残し、次につながる振り返りを行うことが大切である。そのためには、教師が数学的な見方・考え方を意識して教材研究を進めることが必要である。これからも子供たちと授業を創っていきたい。

自ら考え、学び合う授業

東金市立鴇嶺小学校教諭　大関（おおぜき）　直子（なおこ）

1　はじめに

本校は、今年度「自ら考え、学び合う児童の育成」という研究主題の下、研究を進めている。

児童にとって本当に価値のある学びとはどういうものかを考え、授業を実践している。どのような授業改善を行ったのか、授業実践の様子から述べていきたい。

2　授業実践

第５学年　国語科
単元名「鴇嶺小５年生からの提言」
教材名「世界遺産　白神山地からの提言」
（教育出版５年下）

⑴魅力的な学習課題の設定

単元導入の授業で、世界遺産である白神山地の映像を見て、その素晴らしさや価値、問題点に気付いた児童は、「言葉の力で自然を守ろう」という学習課題に目を輝かせた。学習のゴールを「鴇嶺小５年生からの提言の完成」と設定し、言葉の力が実際に役立つ学習課題を持たせることで、根拠を持って意見を発信することの良さ、学びの価値を実感させた。

⑵資料活用のレベルを選択し、活用する場

「資料を根拠に自分の意見を説明する力」を主体的に身に付けることができるよう、意見文の根拠として使う資料を自分で選ぶことができるようにした。自分の意見に合った資料を以下の①から③の三つのレベルから選ぶよう提示した。

①教科書の資料から根拠となる資料を選ぶ。
②教科書の資料及び指導者が用意した資料から根拠となる資料を選ぶ。
③教科書の資料、指導者が用意した資料と自分で見つけた資料から根拠となる資料を選ぶ。

自分の考えを形成するためにも、説得力のある意見文を書くためにも、まずは白神山地のことを知らなければならない。また、「書くために読む、読んだことを基に書く、書いたことを確かめるために更に読む」という「読むこと」と「書くこと」を交互に繰り返す言語活動を行うことで、言葉そのものに対する見方が研ぎ澄まされていく。授業の中では、書くことが得意な児童も苦手な児童も、自分が選んだレベルに応じて、あるいはそのレベル以上のものを目指して学びを進めることで、意欲的に取り組む姿が見られた。

⑶自然な対話を生む思考ツールの活用

本単元では、思考ツールの一つであるピラミッドチャートを活用し、自分の意見に合う根拠となる資料を選ばせた。

①思考を可視化するピラミッドチャート

白神山地について書かれた本やリーフレット、インターネットなどの情報の中から、自分の意見に合う根拠を選んで付箋に書かせた。自分の意見文に使えそうな根拠が書かれている付箋を徐々に上の段に上げていくことで思考を可視化することができた。

②ピラミッドチャートを活用した対話

ピラミッドチャートを一目見れば、友達がどの立場でどんな意見をもっているのか、どの資料を根拠として使おうとしているのかが分かる。さらに、どの資料を使うか迷っている場合には、「こちらの方が分かりやすい。」などとアドバイスをし合うことができる。思考を可視化することで対話が生まれ、意見を交流することができた。実際に友達からのアドバイスにより付箋を書き換えた児童や付箋を入れ換えた児童がいた。友達との対話により、自分の意見や根拠に自信をもつことができた児童は、「すぐにでも意見文が書ける。」と意気込んでいた。

⑷意見文の書きぶりを学ぶ学習モデルの活用

教科書に掲載されている意見文のモデルは、「人間を近付けないようにして守る立場」で書かれており、文体は敬体である。序論・本論・結論の三つの構成、資料を引用して根拠を示していること、更に譲歩構文により、自分の意見をより効果的に表していることなどに注目することができる。本単元では、更にもう一つ、指導者が作成した意見文の学習モデルを用意した。その特徴を次にあげる。

①「人間が自然に関わりながら守る立場」、教科書のモデルとは逆の立場である。

②文体は常体。

③正しい引用の仕方に気付かせるしかけを施した。

教科書に掲載された学習モデルと指導者が作成した学習モデルを活用して、以下のように意見文の書きぶりを学ばせた。

第１時

学習モデルを活用して、学習の見通しを持たせた。一番説得力があるところはどこかをグループで話し合わせて、その文章に矢印を付けさせた。各グループが矢印を貼っていくと、資料を引用して書いている部分に矢印が集中していることが明らかになり、「根拠を明らかにして書く」という本単元で身に付けるべき力を確認することができた。

第４時

意見文の構成や文章表現の特徴について話し合う場面で、学習モデルを活用した。意見文の構成、譲歩構文の効果、正しい引用の仕方などに気付き、意見文の書きぶりを視覚的に捉えることができた。

⑸新たな学びの課題を見つける場の設定

授業の終末には、毎時間振り返りの場を設定し、本時で身に付いた力と次時の課題についてワークシートに記入させた。自分の学びの経過や成長、課題を見つめさせることで主体的に学ぼうとする児童の姿が見られた。

３　おわりに

単元の事前と事後に「自分の意見や考えを文章に書いて表すことができるか」について調査したところ、「大変そう思う」と答えた児童の割合が、22.8％から77.9％へと50ポイント以上も増えた。また、「意見文を書くことは、自分の生活や将来に役立つか」という調査においても約90％の児童が「役に立つ」と答えている。

書くことに抵抗のある児童は多い。しかし、書く力を付けることは、人生で役に立つ。学びの本当の価値が分かることで、児童は本気になって書き始める。そして、今回の実践を通して、児童は、友達同士の学び合いの中で、自分の考えをより確かなものにし、言葉の力を付けていくことを明らかにすることができた。

これからも「自ら考え、学び合う児童の育成」を目指して授業改善に励んでいきたい。